

私のおすすめ この1冊！

写真でマスターする

きちんと 確実にできる 全部床義歯の試適・装着

水口俊介・飼馬祥頼・菊池圭介 著

A4判・96頁・定価（本体6,500円＋税）

2014年3月10日 ヒョーロン・パブリッシャーズ刊

村岡秀明

（千葉県市川市・村岡歯科医院）

私は大学を卒業して、都内に3年ほど勤務した後、一念発起して北海道の僻地にある町立診療所で働いた。そして、その日から1日80人近くの患者さんを診るようになり、多くの総義歯の患者さんも来院してきた。印象採得をし、咬合採得を行い、試適をして、義歯装着して、「痛くないですか、外れないですか」と聞いたら、大丈夫だというので、「じゃあこれで使ってください」と言って終わりにしていたが、ある日、患者さんに言われた。「先生、紙を噛んでカチカチとか、やらないんですか」。そう言われて困った。実は咬合調整をどうやっていいのか、全然わからなかったのである。わからなかったというよりも、まったく知らなかった、と言ったほうが当たっている。

総義歯をテーマに講演してほしいと言われて、「内容はどんなものかいいですか」と聞くと、圧倒的に多いのが、下顎顎堤の吸収が進んだ症例への対応と、装着時の咬合調整である。本書は、シリーズの3冊目で、いよいよ試適から装着へと進んでいく。最近ではCAD/CAMの応用が盛んであるが、総義歯はいまだにロストワックス法による間接製作であるから、印象材の精度、咬合採得時のエラー、ワックスの収縮、レジ

ンの重合収縮など、科学的に作業を進めても、どうしても最後に調整が必要となってくる。このことは頭でわかっている、私も体験したように、具体的にどうしたら良いのかわからない若い術者が結構いる。本書には、それが全部書かれている。恥ずかしながら、67歳の私も「なるほど、なるほど」と読み進んだ。

小説とは違うから、冒頭から読む必要はない。私は、本書を49頁から読むことを勧める。第4章「一連の装着の操作を覚えよう」である。写真が明確に撮れているし、図説で作業の内容が的確に説明されている。辺縁をみて、内面の適合をみて、そのあと咬合調整へと移っているが、その図説をじっくり読んでほしい。ここには、単なる割合の仕方ではなく、どう考えて、なぜそのようなことを行っているかが、詳しく書かれている。写真がわかりやすいので、パラパラと流し読みしそうになるが、もし自分が義歯の調整に習熟したいと思うならば、図説を手書きで写し取ったほうがいい。ただ読むだけと、その文章を写し取るのでは、その理解度は10倍ほど違う。

49～71頁で、「内面の調整」「辺縁の形」そして「咬合調整の具体的な方法」と「最後に内面の当たり方



と義歯の動きとの関連性」まで述べられているが、もし、そこで基本的な事項の理解が足りないと思ったら、第1章「ロウ義歯試適の流れ」～第3章「研磨面形態と歯肉形成の原則」に戻ればいい。そして理解が進むようであれば、最後の第5章「よい義歯に仕上げるために」に移るといい。ここには、総義歯臨床のコツ・真髓のようなものが書かれている。

小説は、読む時期や年代によって内容の捉え方が変わることがあるが、読む年齢や置かれている環境、また経験などが捉え方や感じ方に影響する。

本書にも同じことが言える。まだ総義歯臨床に携わったことのない若き臨床家は、それほど図説にこだわることなく、写真をみながら流し読みすればよい。そして実際の臨床に臨むことになった時、本書をチェアサイドに置き、試適の時のチェックなども漏れのないように進めていくとよい。総義歯臨床は、うまくいっていると思うと、突然おさまらないような症例に出くわすものである。そのような時に、今度はじっくりまた読み込むとよい。きっと答えがみつかる。本書は、名著と評される小説に匹敵する、深みのある総義歯臨床テキストである。